

イタリア保育

おもいきって

参観記 (4)

三大ラボラトリーオ ベネト州パドヴァ市

金澤妙子
(大学教員)

勤務先の海外長期研修制度で、私はイタリア・エミリアローマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間滞在した。その七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけである。

今号は滞在中、月平均二回程度と日数は少ないが、一園に絞って一年間継続観察したベネト州パドヴァ市の公立幼稚園を紹介する。



▲訪問園近くの公園プラト・デッラ・ヴァッレ



パドヴァ市公立幼稚園との出会い

イタリアの学校暦における夏休みは長い。しかも五月下旬になるとバカンスに出かける家族や職員が開始、子どもも職員も全員がそろうことはなかなかない。気分も雰囲気もバカンスモードに入っている。パドヴァ市在住の知人のお子さんが通う園では、それを見込んで、年度末の修了フェスタ(本連載(2)参照)を五月の最終土曜日に終えていた。六月末、学校暦が終了すると、園が開くのはたいいてい九月半ば。滞在地リミニ市でも開園は九月十七日、保育者は九月の第一週から新年度準備に向けて勤務する。

そうした中で、パドヴァ市では、九月第一週から子どもが登園している。二〇一〇年、研修下調べに出かけた際、知人のお子さんの三歳児入園初日に行した。日本の入園式のようなものはなく、午前中だけが通常の登園風景、部屋には、「ようこそ〇〇(新入園児組に対して)、お帰りなさい〇〇(進級児組に対して)」の壁面装飾。遅くとも八月最終週には保育者が勤務に就いていることが想像され、システムとして整っているという感じを受けたことが観察依頼のきっかけであった。

ずっと異年齢保育で

パドヴァ市は人口約二十万、北イタリアの大学町である。「表面をさらっと通り過ぎるのではなく、一年間の様子を継続して見たい」という私の希望に同市教育委員会が用意してくれた園は、観光スポットにもなっている *Prato della Valle* (冒頭写真) という、堀に囲まれ彫刻に縁どられたような美しい公園近くにあった。園の周囲は緑多い住宅地である。

市内に十一ある公立幼稚園はすべて三歳児からの異年齢保育。教育委員会での初打ち合わせで、少子化がその理由かと問うと、幼稚園を統括する担当者 ベテコジスタ は、次のように説明した。「三歳児だけだと、一人が泣きだすとほかの子も泣くようなところがあるが、縦割りなら小さい子は泣くかもしれないが慰める子もいるなど、子ども同士が助け合うことも出てくる。それがまた、子どもの成長を助ける」。三十年以上パドヴァ市公立幼稚園に勤務する二人の保育者は「ずっとこうよ、横割り編成だった時やそういう園はないわ」と言う。教育委員会が言うような年上の子どもが年下の子をいたわる場面はもちろんあるのだが、社会性や規範意識が育ってきた五歳児が、やってはいけないことをしている三歳児を注意したり、諭そうとして、三歳児の奔放さに負けて泣きだしてしまふ場面などを、私はとても面白く見た。

一クラスには、二十五名の子どもと二人の保育者。何クラスあるかは園によって異なる。保育者の勤務時間は六時間、登園時からいる保育者は十四時まで、

十時に出勤する保育者は十六時までという勤務体制はリミニ市と同様であった。私が観察した園では毎年年度初めの九月に、カリキュラムの担当者と建物や物質・環境的なことを担当する保育者を話し合いで決めて園内の職務を分担し、その人を軸に動いていた。この園の二人の担当者はたまたま三年間継続して、分担している事柄に精通しており、私の質問にいつもの確に答えてくれた。

LABORATORIO

パドヴァ市の保育で書いておかなければならないのは、ラボラトリーだ。この連載(2)でも園への両親の参加について紹介した際に出てきた言葉だが、それとは違う。例えば宝石を作っている工房でもラボラトリーオという看板を掲げていて、この言葉は街中でもよく見かける。

ボローニャ市やリミニ市の保育では、絵の具やトウモロコシの粉を思い切り使う部屋やそこでの活動をラボラトリーオと呼んでいた。リミニ市の幼稚園

では、クラスの一隅に小さなテーブルと椅子を置いて、保育者と一対一かごく少数で制作をするような時にも、この言葉を使うことがあった。子どもの作業に、幼児には高度なテクニックを保育者が加える。保育者の手助けでミックスした素材使いのアイデアや平面と立体のコラボレーションなど、私が日本の園では見たことのないようなものに仕上がっていた。

ほかにも、ジョコgioco libero (自由遊び)、アッティビタattività (活

アッティビタattività guidata (指導的な活動)、アッティビタattività libera (自由な活動) などがあり、私はよく、「これ

は？ それとも？」と確かめた。はっきりと答えが返ってくるものもあったが、保育者自身、限定し難いものもあった。コーディネーターチェ(本連載(1)参照)や保育者は、「少数で手を使う」とことと説明する。街中で見かける工房のイメージに近いかもしれない。

パドヴァ市の園で言っているラボラトリーオも、「一定の場所に行き、テーマに沿って作ったり演じたりする」とことと説明される。ただ観察と保育者や

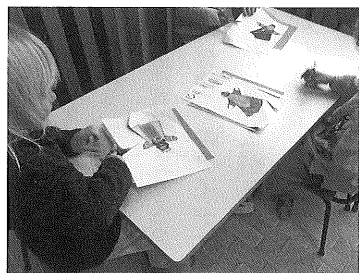
ペダゴジスタの説明から、年間計画（のテーマ）を
実践していく際、集中的に体験させる分野・くくり
のようなものだと思う。特にテーマを設定していな
い園もあるが、ラボラトリーオはどの園にもあり、
どういうラボラトリーオか、その数は各園で決めて
いる。この園には音楽、言語、科学の三大ラボラト
ーリオがあった。外国人が多いと、保育者や周囲の
子どもとの人間関係、その子の生活習慣の獲得など
に言葉の問題が影響するので、言語のラボラトリー
オの枠を広げるなど、クラスや子どもの状態で時間
数は変わることもあるが、これらはいつもある。

今年度のテーマは「acqua（水）^{アックワ}」。園のすぐそばに
巡らされた一五〇〇年代に造られた壁が壊れて新園
舎の工事中で、私が観察した年、園舎はウナギの寝
床のように細長く、園舎に沿った園庭はそのままブ
レンタ川の支流にも沿っていた。川面にはカモやア
ヒルが戯れ、川岸にはいろいろ生物が生息する。
園庭と川岸の境にある網状の柵の下方はめくられてい
て、水際は子どもには魅力的な場所のようだ。カモ

が卵を産んでヒナがかえるのを見たりした時の跡ら
しい。川に至近の立地から決まったテーマだ。

川ではなく「水」になったのは、「前回のテーマが
『虫』で、科学のラボラトリーオが多かった。川だ
と、ともするとまた川辺の生き物のほうにいつてし
まう。もちろん『水』でも、こんなに川が近いので
川辺の生き物は扱うだろうが、『水』のほうが、例え
ば雨も題材にできるなど広がりが出ると子どもの経
験も広がる。前回との重複を避け、保育者も子ども
も新鮮な思いで取り組むと思った」からだという。
『水』と音楽のラボラトリーオをどう絡めるかは難
しいように思い、尋ねると、

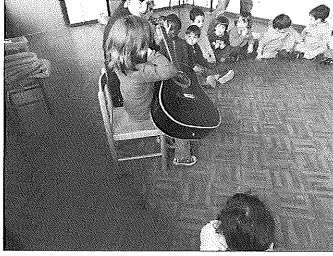
「言語については『水』にま
つわる絵本を読み聞かせたり、
それを劇活動にしていくなど
は話し合っているが、音楽は
確かに難しい。三大ラボラト
ーリオと言っても、テーマに
よっては当てはまらないとこ



▲言語のラボラトリーオ
お話をペープサートにしているところ

ろが出てくる場合もある」。仕方ないわという意味合
いで肩をすくめて両手のひらを広げ、「でも、一つの
ラボラトリーオの中にいろんなものがあるから大し
た問題ではないわ」と言っていた。イタリア人らし
い大ざっぱさというより保育の実際はそんなものだ
ろうと思ひ、納得した。無理に三大ラボラトリーオ
に引き付けるとしたら本末転倒だろう。ラボラトリー
オは、大事にしていきたい分野に過ぎない。

入園当初から二か月ほどは適応^イ見合^セわせ^リ期間^ドで、
子どもが園生活に慣れることを最優先に考えるため
ラボラトリーオはない。十二月までに決め、教育委
員会のチェックを経て一月半ばごろから開始してい
た。リミニ市の教育プロジェクトとほぼ同じである。



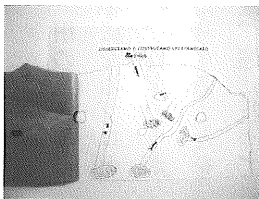
▲音楽のラボラトリーオ

ラボラトリーオは、火・
水・木曜に行われる。朝の
集まりと室内での好きな遊
び（ブロックやパズルなど
の玩具、粘土やトウモロコ
シの粉、描画、ごっこ遊び

など）の後、十時半ごろから同年齢編成になる。こ
の園は三クラスあるが、どのクラスにも共通した各
年齢を呼ぶ名前（例・三歳児^Ⅱこぐま）があり、各
クラスのこぐまが階下で音楽のラボラトリーオ、四
歳児は○組で言語のラボラトリーオ、五歳児は△組
で科学のラボラトリーオという具合である。各年齢
のラボラトリーオは基本二か月ごとに変わり、三つ
がローテーションする。かつて私が勤務した大学の
幼稚園も縦割り編成だった。午前は通常のクラス（異
年齢）で過ごし、午後は同年齢で活動する。かなり
重なる部分があった。

ラボラトリーオの実際〈複合性〉

今年三月下旬、科学のラボラトリー
オで、子どもたちはお手製のメモ
用紙を首から下げて、川にかかる橋
の上からカモやアヒルを観察しに出
かけた。前年度、園庭の虫やアリの
巣を観察する時にもやった方法であ



▲科学のラボラトリーオ
「アリの巣を観察して作ってみよう」

る。今回は園の敷地の外にいる生き物の観察なので、保護者の外出許可が必要である。子どもたちの水鳥への興味・関心、それを園庭から金網越しにはなく橋の上から見たい、読み書きのできない子どもたちのそういう声を、保育者が両親へのお願いとして大きな紙に代筆し、その周りの白いところに子どもたちが署名したものが園舎の入り口近くのスペースに張り出されていた。

リミニ市の幼稚園でも時折、子どもたちは市役所所有のスクールバスで園外へ出かけた。クラスの戸口に張られた園外保育のお知らせの下には園児の名前を書いた用紙があり、許可する保護者は自分の子どもの名前の脇に署名をしていた。みんなサインをするが、許可なしに連れていくことはできないのは常識のようであった。

門や柵どころか、周囲の田畑や住宅地と園の敷地を仕切るものが一切ない郷里の保育環境になじんだ私には、すぐその橋に行くのに何と窮屈なと思うことではあったが、もちろん両親と教育委員会の許

可が下りて出かけたそうだと。

ラボラトリーオとしては科学だが、川の生き物に対する自分の思いを言葉にする、活字になるプロセスは、言語のラボラトリーオでもある。科学のラボラトリーオでは、実際に見たり触れたりすることを大事に考えている。テーマ『虫』では、畑に行って虫を探そう(三歳児)、どんな所にどんな虫がいるか(四歳児)、五歳児になると「足が何本あって」と虫にかかわる目的は細かく具体的になる。四歳児では、バッタを庭で見つけたことからバッタになってみる、見たもの(毛虫)を描いてみよう、音楽のラボラトリーオの中の活動として「音楽を聞いて感じたことを絵にする」などという記述もある。日本の保育内容「領域」の重なりと似ているが、学習の要素は、よりはっきりしている。「庭で捕まえたテントウムシを放してあげた」と言うので、日本では飼うことも多いと話すと、「放すことも見せたい」そうので、園では飼わないという点は違っていた。

— 次号は最後です —